展 景

季 刊

No.80

December 2015

季刊　展景 80号

目次

牧場葬〈短歌〉……河村郁子　4
秋深し〈俳句〉……谷垣満壽子　6
人形茸〈俳句〉……新野祐子　8
山形国際ドキュメンタリー映画祭〈短歌〉……布宮慈子　10
掻巻〈短歌〉……丸山弘子　12
八月のフロリダ〈短歌〉……結城　文　14
心暗き日〈短歌〉……池田桂一　16
秋の風〈短歌〉……市川茂子　18
第38回日本スリーデーマーチ〈短歌〉……小野澤繁雄　20
《招待席》伝えてゆかな〈短歌〉……大石久美　22
東京歌会……24
本郷森川町……松井淑子　26
〈那須通信 25〉十一月X日のこと――蝶の遣い……加藤文子　28
対詠　ごきげんいかが？　PART 56……小野澤／布宮／河村　32
前号作品短評A……34
前号作品短評B……36
エッセイ教室「清紫会」の作品より
富山行……大石久美　38
ニャーのこと……丸山弘子　40
昔と今……池田桂一　42
「清紫会」だより……45
無二の会短信……46
編集後記……50
今号のイメージ／カボチャ

牧場葬

河村郁子

わが犬を送葬したる霊園ゆ封書が届く四年が経ちて
文面は友愛観音御許(おんもと)に預かりいただく遺骨について
ラッキーを荼毘せし遺骨は壺に入れ七七日(ななぬか)間かたへに在りき
納骨は哲学堂の霊園の観音像の真下に合祀

合祀せるペットの遺骨が満に殖え移したりとぞ「日高牧場」
すぐさまに「日高牧場」検索しYou Tube(ユーテューブ)に見る北国の四季
広大な美(は)しき牧場(まきば)には数頭の馬それぞれに草を食みゐる
「サラブレッドのふる里」なればラッキーよ土に還りて牧草になれ
名馬らの生ひ立ち護りてとことはに汝(な)が魂の安らかならむ
けふよりは日頃味はふ昆布には〈日高〉を求む〈利尻〉に非ず

秋深し

谷垣滿壽子

書きかけの夫の日誌や秋彼岸

はらからに相槌のみや栗を剝く

草木今光に濡れて良夜かな

十六夜のスーパームーン雲間より

活けられて風忘れたり秋櫻

反り橋の反りの確かさ曼珠沙華

子の切りしテープの白さ天高し

指広げ浸せば透ける秋の水

長き夜や亡き友の文出できたる

山は今染め上げられて秋深し

人形茸

新野祐子（にいの）

逆光に耳透きとほる芒原

静けさの真ん中へ跳ぶ竈馬（いとど）かな

青北風（あをきた）とカレーピラフを炊ぐ香と

星月夜何もかも入れ温サラダ

栗拾ふ愉しき言葉拾ふやう

にび色の空きらめかせ鮭のぼる

囁きのかたちに人形茸（にんぎやうたけ）生まれ

蒼天へ投げ込むボール秋惜しむ

絶望せぬとふ処方箋濁酒

流星を追ひ漂泊となりてあり

山形国際ドキュメンタリー映画祭

布宮慈子（やすこ）

はるかなる海岸線をもつチリに海と生ききし先住民ゐて
水と星をいのちのシンボルとせし民は植民により殺されきチリに
今にして海から上がる重りあり独裁政権に消されし者ら
負の歴史みつむるチリは鮮やかに水の記憶を呼び起こしたり

海と空かなしみふかくしんしんと『真珠のボタン』の映像語る
四中（よんちゅう）の百三十人も観てゐたりアルゼンチンの『ラスト・タンゴ』を
アルゼンチン・タンゴのもてる愛憎を中学生のこころ受け止む
受賞ののちイラクを撮りし監督は次の世日本人（ハポネ）にならむと言へり
それぞれのルーツをたどる旅にして音楽と生くペルーの民は
映画観てわが足元が南米の道となるころ秋は深まる

掻　巻

丸山弘子

ベランダに掻巻といふ夜具干され思ひがけなき懐しさにゐる

亡き母の掻巻の柄思ひ出づ鹿の子模様にビロードの衿

プランターの花に久しよ枯れ色のオンブバッタの雌雄がをりぬ

植木屋の入りたる庭のよそよそし椿、山茶花直立してゐる

激しき雨止みたるのちの草むらゆ湧き出して舞ふシジミ蝶の群

調査員「替へどきです」とにべもなし二十余年共にありしガス器具

旅先の老舗の嫗（おうな）おもひつつデパートにことしのわらび餅買ふ

体調に異変ありしや町中に会ひたる友の頬のゆがみは

はなやかな人たりし礼さん夫追ひて己れも十月生れ月に逝く

半とし余休業ののちのレストランメニューしぼりて再開するとふ

八月のフロリダ

結城　文

カストロのキューバ逃れし難民の二世らとゆくマイアミ・ビーチ
大いなる緑の傘を拡げたつ樹齢八百年の大木に遇ふ
甘やかな青海カリブ海わたる朝風にそよぐバンヤンの葉むら
褐色の気根のひげをあまた垂るるバンヤン老爺のごとしと見あぐ

ベイサイド・マーケットゆけば英語よりスペイン語優勢に聞こえくるなり
メキシコの旗を体に巻きつけし女が歌ふ真昼のカフェ
その出自は分かねど散策の足とめて「ビバ・メキシコ」と唱和する観衆

サント・オーガスティンへ遠足

ティムナカン先住民の遺跡跡めぐりてをれば雷鳴とどろく
変若水（をちみづ）といふがフロリダにもありてプラスチックのカップにて受く
発掘は十六世紀のスペインの侵攻を確かなものと裏づく

心暗き日

池田桂一

傘を持つ手は感覚の無きままに霙(みぞれ)の街に自転車をこぐ

朝からの積らぬ雪に長靴を履けるはわれのみ乗換えホームに

つきまとう署名をさけて人混みに虚しく入りぬ心暗き日は

鉄骨の組まれて久しきビルの上に音なく師走の雨降りつづく

工事中の札ひるがえり見上げれば足場を組めるひとと目が合う

指先の冷たくなりてポケットにまさぐるコインは温みを保つ

夕寒むの空まだ赤し公園の欅に群るる椋(むく)鳥さわがしく

竹垣の真新しくて冬陽さす庭隅につつじの返り花あり

もだえるが如き仕草をくり返し西陽を受けて歩む冬の蠅

夜更けて忘れられたる干し物は鞭のごとくにガラス戸を打つ

秋の風

市川茂子

秋の雨つづきて庭に伸びきたる彼岸花咲くを待つなつかしく

亡き人の吾(あ)を呼ぶごとく彼岸会の近づく頃に花咲きはじむ

ビルの上に満月かかり喧噪の街のひと日を寝に誘なうも

秋の風静かに通る今朝の空良き便りなど当てもなく待つ

澄みわたる秋の陽まぶしわが前の一鉢に咲く小花紫

高きより覗く夕ぐれ街の灯を包む鈍色(にびいろ)冬の兆しに

高層の階より見渡す空と街とけ合う夜の明り彩る

オリオンの流星ひとつは過去の星ボヘミアンなる人を恋いし日

反対の声上げて広場に集う人わたしを守れるか問いただしたく

骨粗鬆症の予防に効くゴマその量を二倍に入れてゴマ和え作る

第38回日本スリーデーマーチ

小野澤繁雄

中学校は校門近くおのずからかさなり混じる姿生徒ら
出来事の小ささはあれ吠えられて足は傾く小校庭に
週末も造成工事はあるようだホースに水を撒いている人
奥向きに三段階にみえる山今日はみえぬと絵を描(か)く人は

花は菊花ある家の庭先に置かれてハロウィン南瓜がふたつ
マーチのなか耳に拾いつつ声々は若者の声加減なきもの
ゼッケンにメッセージ「歩きます。」は中学生走らないという意味か
「みちじゃない」中学生が云う土のみち埃を立てて彼ら歩き方
菊花展は関係団体多くして半ば必然に受賞花多し
ほんとうに繋がっている子どもたち曳いて摑んでそのまま走って

《招待席》

伝えてゆかな

大石久美

歌は自分で詠んで弔うという師の言葉思いかえしぬ生死（いきしに）のこと

住みて十年なぜか馴染まぬ街歩む右側ながき影ともないて

地上には超高層のビル並びその地下道に棲むひと眠る

川向うの隅田の花火一瞬をテレビの画面と共に弾けぬ

物の影一切置かぬ夏の陽の下に乾きし道は延びたり

地上十一階石庭の片隅に自生をなせり彼岸花咲く

身に棲める鬼もそこそこ年齢（とし）なれば一刻たてばみな忘れゆく

漂いて歩む姿を坂に見つわれは如何にと背を伸ばしゆく

輪廻転生さもあればあれ君がまたこの世に生（あ）れむ平和なる世に

戦争の傷み苦しみ知る人の尠くなりぬ伝えてゆかな

大石久美（おおいし　くみ）一九二八（昭和三）年、東京生まれ。所属結社「綱手」。歌集『八角時計』『翔ちてゆくものへの挽歌』『昭和幻燈歌篇』。二〇〇七（平成十九）年度、綱手賞受賞。『昭和幻燈歌篇』にて、二〇一一（平成二十三）年度、日本歌人クラブ・東京ブロック賞受賞。

東京歌会（第三十六回）

平成二十七年九月十七日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室。詠草は、各二首十首。出席者五名（市川茂子、小野澤繁雄、林博子、松井淑子、丸山弘子）。

・ひとしなみ雨に濡れたるそのなかの露を置く葉やまた雨に濡る　小野澤繁雄

「ひとしなみ」は区別なくということ。ひとしなみに、と使われることが多い。葉は山芋の葉か。長雨の中の光景。やさしい景だが、秋とは必ずしも指示されていないようだ。

・亡き人の吾を呼ぶごとく彼岸会の近づく頃は花咲きはじむ　市川茂子

花は、同時の歌、三、四句「彼岸会の近づく頃は」からも彼岸花。いかにもなだらかに詠んでいる。

・県境を仙山線に越えゆけば「陸前」の付く駅名ふたつ　布宮慈子

宮城県と山形県の「県境」。また「陸前」の付く駅名は陸前白沢と陸前落合のふたつという。「陸前」の付く駅名は仙山線以外でもあるようだ。「陸前」というコトバの範囲、拡がりが話題になった。「陸中」というコトバもある。白沢、落合が既知ということでもある。歌は多くを云っていないが面白い。

・夜に入りて火照る両の掌痛みもつ包み抱きて愛しむわれは　林　博子

日中はいろいろ追われて手を使うことも多い。いちいち手を気にすることもないし、できない。「夜に入りて」改めて痛む手を気遣うことになる。ここでは「掌」と限定的だ。何か一日をじぶんに回収するような身振りがある。

・同地域に降りつづく雨天気図は線状降水帯の上下する見す　丸山弘子

「線状降水帯」を歌で読むのははじめて。歌に詠むのもはじめて、か。初、二句でその説明をしているが、そういうこともいらなくなりそうな状況がある。きびきびと歯切れよく詠われた。二句を動かすとすると「雨降りつづき」となるか、そんな案が出された。

（小野澤繁雄）

本郷森川町

松井淑子

私は、本郷は森川町（現・文京区本郷六丁目）の生まれである。場所的に言うと、東大正門前の万定という果物屋の脇道をはいった突き当たりの、新坂という急な坂の下り口のあたりで、ここで小学校に上がるすぐ前まで暮らしていた。

本郷界隈は関東大震災にも太平洋戦争の空襲にも被災せず、比較的最近までむかしの面影を残した町と言われていたが、ここにきて、このあたりがかなり変わるらしいという噂を耳にして、久し振りに訪ねてみた。

新坂を上りきると、左手に工事用の白い囲いをめぐらせたその向こうに、かなりな広さの空地が見えた。太栄館という旅館を取り壊した跡地である。太栄館はたしかこの前の戦争の後にできたはずで、それ以前、私が暮らしていたころは、ここには蓋平館別荘というかなり大きな下宿屋があり、若いころの石川啄木はじめ多くの文人作家たちが下宿していたようである。

内田百閒なども学生時代ここに下宿していたことがあったとみえ、作品（「四軒長屋」）に、間代は六畳一間で七円五十銭、と書いてあるのを読んだ覚えがある。

それやこれやで有名な下宿屋だったのかどうか知らないが、子供のころ、「迷子になったら、家は本郷区森川町の蓋平館の隣、と言いなさい」と母からよく言われたのを覚えている。私の育った家は実にこの蓋平館の隣で、もしかしたら蓋平館の家作を借りていたのかもしれない。

太栄館、すなわち旧蓋平館の跡地の前を通り越し、東大正門前に向かって歩く。むかしの面影を残した町とはいうものの、戦後七十年も経つと、さすがに家並みはほとんど現代風に変わっている。何年か前にきたときは、それでも知った苗字の表札をぽつぽつ見掛けたが、今度はそれもない。

しばらくいくと右手に煙草屋があった。店構えはやや変わっているが、間違いなく父がよく煙草を買っていた店である。むかし私と弟は、大学に通う父をときどき表通りのほうまで見送りにいったが、すると父はここで必ず煙草を買い、ついでに私たちにもキャラメルの小箱を買ってくれたものだ。そして果物屋の万定の脇から表通りに出ると、父は私たちに手を振りながら通りを渡り、大学の正門の中に消えていった。

万定といえば、表通りに面した果物屋のほうは何年も前に店を閉め、以後シャッターを下ろしっ放しだが、同じ万定経営の裏のフルーツパーラーのほうは、以前と変わらない姿でいまも店を開いているようだった。石造・洋館風の建物で、当時はしゃれた店とされていたのだろうが、いまでは古色蒼然といった感じである。たしかハヤシライスが評判だったように思う。

〈那須通信 25〉

十一月X日のこと――蝶の遣い

加藤文子

朝食をとりながら外を眺めていたら、季節はずれのモンシロチョウが、とまどったように、温室と外を何度も行き来しているのが見えた。その様子は、こちらの注意を促しているかのようにも思えた。そんな一日のはじまりだった。

那須の山の頂に雪が懸かっている。まだ私の住む平野部では降らないけれど、朝の風の冷たさは氷のようだ。ゆっくりすすめてきた盆栽の取り込みも、急がなければならない。

せっせと作業に取り組もうとしながらも、ともすると、晩秋の庭に心をうばわれて手が止まる。しかも、朝の寒さとは裏腹に、日中は晴れて気温は上昇し、陽気は心地よく、ますます動きを鈍らせる。

むらさきと茶と赤が精妙に配色された庭。

季節もここまで進むと、リンドウの花は日ざしがあってもしっかり開かなくなる。けれど、茎や

葉をむらさき色に染めてわずかに開いて咲いている姿は、別の美しさがある。

秋色。植物の生涯から搾り出されたような雅やかな色調は、彼岸のようだと思った。天空から降りそそぐ光にまぶされた赤銅色の情景を、他に何と呼ぼう。

その秋色のボォーッとしてしまうような陽だまりに突然降りてきた――そのように耳は捉えたのだが――声がある。

「文子さん、よくいらしたわね」

それは盆栽村にいた頃、よく訪ねさせていただいた盆栽園、K園の富美さんの晴れた声だった。

富美さんはいつもそう言って迎えてくれた。あまりに空が青く澄んでいたので、富美さんの晴れやかな声を思い出したのかもしれない。

当時、道をはさんで斜め向かいにK園はあった。近いからというよりも、何より好きだったから通ったのである。

格子の門構え、陳列室のある主屋へつづく露地からして趣があった。門をくぐり、ゆるやかなカーブの露地を抜ける間に、気持ちも落ちついてくるのだった。そこは、世の中の喧騒とはかけ離れた世界に思われた。

陳列室の床の間、そして大谷石の床、その他調度の数々……。そうして、季節の盆栽がさりげなく飾られているのも、床しいふんいきがした。K園の盆栽には独特の品格が備わっている。その品格は、小さな盆栽から大きなものに至るまで、どれにも等しく感じられた。

富美さんが普段身につけていた着物の着こなし、ゆるく締めた帯の感じやお手製の前掛けもすてきだった。ご主人が亡くなられてからは、たまたま月命日にうかがうと、陳列室の正面の袋戸棚がわずかに開けてあった。お位牌をのぞかせているのだと笑っていらした。嘴（くちばし）をカチカチ鳴らすのでかっちゃんと名付けたミミズクがいたり、薪（まき）でおふろを沸かしていたり……。

仕事することと愉（たの）しんで生きることは、イコールでつながっている。静かな佇まいの中に、そんな空気が漂っていた。

盆栽村開村以来、ご主人と共にたくさんの愛好家をもてなした富美さん。青い空の下で、盆栽の取り込み作業をしながら、富美さんやK園の風流を想うのだった。

作業はあまり、はかどらなかった。

ムラサキエノコロの最終の姿

対詠　ごきげんいかが？　PART 56〈2015〉

O　小野澤繁雄
N　布宮　慈子
K　河村　郁子

鉄棒も遊具のひとつか色ぬられ小校庭は秋の雨なり　9月18日　O

雨あがりのピッチを駆け上がる選手たち「みちのくダービー」けふ決戦ぞ　9月26日　N

秋霖にいろはもみぢが浄められ華やぐときに備へるらしも　9月29日　K

この秋のさいしょの粒か一つ実を銀杏並木の道上にみとむ　10月3日　O

どんぐりを多（さは）に生らせる街路樹の下をほいほいほいほい歩く　10月7日　N

夕つ陽に花水木の実の朱に映えて俳句子の入選共にたたへる　10月9日　K

コスモス畑は日傘の女性傘のみの傘のうごきに人みうしなう　10月11日　O

山形国際ドキュメンタリー映画祭終はれば野にはコスモス揺れて　10月15日　N

みだれ咲く今様コスモスいろどるは信濃の街道　若ものばかり　10月19日　K

土曜日のテニスコートは中学生らヘイヘーイ一人が声を出している　10月23日　O

夕まぐれヘッドライトに照らさるる中学生の背は真一文字　10月30日　N

朝練へ走る中学2年生スポーツバッグと鞄が躍る　11月2日　K

しずかにも帽子の続く子らの列足は側溝の蓋を踏む音　11月4日　O

幼らは落葉を踏んでカサコソと時おり葉つぱを蹴り上げてゆく　11月8日　N

紅葉を極めし葉の散る花水木の枝の先にはちいさき蕾　11月11日　K

商いの中味のしれぬ小工場みちに並んでみな雨に濡る　11月20日　O

冬支度をせかすやうに時雨ふる青菜（せいさい）大根蕪（かぶら）もらへば　11月25日　N

庭石によせて植えたる千両の実の色づきて時雨にぬれる　11月27日　K

秋雨に駅まで歩く思うことあるというよりただ映るもの　12月5日　O

晴天のつぎの日は雨　山形の空を眺めて四年が過ぎぬ　12月13日　N

前号作品短評Ａ〈小野澤〉

●絶ゆるなく湧きでる水を見つめゐる時のやすらぎ　時のやさしさ　河村郁子

一連「湧水」の三首目の歌。さいしょの歌から、この歌の湧水は（石神井公園内）三宝寺池奥にあるようだ。ネットでは三宝寺池は井の頭池、善福寺池と並んで武蔵野三大湧水池として知られ、とある。パワースポット度三ツ星ともあった。

ある時間をやすらいでいる作者とそういう時間を与えてくれた時間性と、時間を味わうような感覚がある。「湧口（ゆくち）」から「水門をぬけ石神井川へ」「せせらぎ」「井の頭、善福寺池の湧水と交はり流る」、さらには「墨田の川に入る（流れは老熟の色）」という。

流れは時間の重なった相をみせることによって作者をある思いに結ぶ。

●海の香のつのる浜辺や夏の伊豆　谷垣満壽子

タイトル「夏の伊豆」の句。気持ちもつのるのだろうな、と思う。児のものであっても構わない。夏の伊豆でイメージが立つが、時間性、遠近感、児と描写され、間に挟んでこんな句がある。

神話にも身を焼く恋や砂灼くる

気持ちよく読んでいって、さいごに置かれたこの句には立ち止まるようだ。何かいっしょに「闇の流れの中にゐる」ようだった。人の流れということだが。

花火果て闇の流れの中にゐる

●人影の揺れ目高揺れ棚田美（は）し　新野祐子

友の魂梅雨入（たまつい）りの佐渡へ連れ出しぬ

これは一連「朱鷺守る人」のさいしょの句。「友の魂」はややわからない。友は故人で、佐渡住まいだった人、佐渡にいったことのある人、佐渡を話題にしていた人、などなどと読んでみた。以降、佐渡での句とみられる。冒頭の句。時間が止まったような空間性が際立っている。

四つの句に朱鷺が出ていて、そのさいしょとさいごの句。ともに鮮やかな姿態。

朱鷺の群夕焼（ゆやけ）が空をよぎるごと

振り向けば朱鷺の降り立つ田草取

●大水に決壊したる堤ありひととせ干上がつたままの溜池　布宮慈子

一連タイトルは「溜池」。ここでは一連を通して溜池を定点観測のように見ている眼がある。それもあたたかい眼が。ゆったりとした時間の営みのようなものが感じられる。この歌は、語りの発端になる。二首目の歌はまだこんな風、

通るたび底を晒して溜池は生き物のかず減らしてゆきぬ

真ん中の歌（五首目）でようやくこんな風、

水嵩の戻りたるころ鳥が来て牛蛙鳴き糸とんぼ飛ぶ

前号作品短評B〈慈子〉

●沼なのか流れのいちぶか水門も半ばかしいでそれら中途さ　小野澤繁雄

「中途さ」は、中途半端さ加減のことだろう。独特の言い回し。沼かどうかさえ不明な場所は、誰も注目する人はいない。が、作者には気になる。やはり独特の視点である。掲出歌の「沼なのか流れのいちぶか」、四首目「減りゆくものか」、八首目「風はうごいているものか」と自問のような表現が目立った一連だった。はっきり「記憶」と表明しているのは次の歌。

花の名は忘れたれども記憶には少年のわれ花壇に遊ぶ

●後継者なきゆゑ洋服店は廃業と人づてに聞くドア閉ざされてあり　丸山弘子

一連のタイトルは「廃業」。作者は東京・中野に住んでいるのでその近辺と思われるが、洋服店に限らず、日本じゅうで見られる光景ではないだろうか。店を存続できない理由はさまざまだ。いまや洋服を誂(あつら)える人は少なくなってしまった。閉店によって自分の過去も消されるような言いようのない寂しさが、二句と結句の字余りを生んでいるといってもいい。さらなる現実は次の歌に。

壊されて思ひがけなき広さあり野口洋服店の整地はじまる

●石ころを土より除き積上げてオリーヴを植ゑぶだうを植うなり　結城　文

クロアチアを地図で見てみる。イタリアをブーツに例えると、ふくらはぎの後ろ側、海（アドリア海）を挟んだ対岸の国。モンテネグロは、ブーツのかかとの対岸。ともにバルカン半島に位置する国である。地中海の島でオリーブやブドウの畑が営々と作られてきた様子が伝わってくる。クロアチアのフヴァル島北部に広がるスターリグラードは、世界遺産に登録されているそうだ。

天につづくスターリグラードのぶだう掬ぎ少年は甘しといひて微笑む

●風過ぐる木下(こした)に佇(た)てば売子木(えご)の花雪降るごとくうつつに散りぬ　池田桂一

短歌らしい短歌。題「三四二(みよじ)の花」は、えごの花を上田三四二がとりわけ好きだったから。初夏に咲くえごの花の白さが雪のようで、この現実のなかに散ったという。まるで、あの世からこの世へ降ってきたようではないか。上田三四二は弟子を持たなかったから、弟子と名乗る人はいないだろう。しかし、身近にいて影響を受けた人はいる。作者もそのひとり。三四二の歌を紹介する。

よりあへる枝ことごとく花こぞりえごは若葉の杜を白くす　上田三四二『遊行』

●戦いの終わる日早く成らずして一月四日は父の命日　市川茂子

硫黄島の沖に沈みて七十年かすかな記憶は父の幻

先の戦争が終わって、ことしは七十年という節目だった。作者にとって父親の記憶は確かなようでもあり、空想のようでもあるらしい。分かりやすいが、現実の重みを感じさせる歌である。戦争は多かれ少なかれ、かかわりのある者は、その思いを一生背負っていくものなのだ。

エッセイ教室「清紫会」の作品より

富山行

大石久美

九月の末、二十八日から三日間、父と母の生家を、妹と従姉妹の妙ちゃんとの三人で、新しく開通した北陸新幹線に乗って出掛けた。

十年ぶりの富山行であった。それぞれが、これが最後かも知れないと内心思っていたようだが、そんな素振りは見せず、「昔は十二時間もかかったよね」等々、お喋りをしているうちに、着いてしまった。あまりにも早いので、外の景色を娯しむという余裕もない。新高岡の駅に着くと、母の生家の従弟達が駅前に迎えに来てくれていた。

ふと、七十年むかし、終戦の折、女子は東京にいると危険との事で、その頃の勤務先・海軍から、それぞれの最寄の地への汽車の切符が配られ、私は慌しく汽車に乗ってここに着いた事を思い出す。それは杞憂に終ったが、母の生家に二十日あまり暮した覚えがある。廃墟のような東京の町並からきて緑滴る森や畠の中に立ち自然の優しさに包まれて、戦争が終り生き残った幸せを改めて感じた。

現在の町は、道路の幅が広くなり、各戸の前を縦横に通っていた小川も殆どない。昔は、武家屋敷の名残りか、門を入ると、馬小屋の跡や玄関には、長い式台が横たわっていたのだが、外廻りはばかにすっきりしている。去年改築したというこの家は、広さは昔のままながら、リビング、トイレなど、大きく設えてあり、ホテルのように明るい。次の日は移動して、やはり富山の福岡町の父の実家を訪ねた。

ここは以前私が訪ねたままの面持ちで、池の鯉も、時おり大きく跳ねるのが歓迎してくれたようで嬉しい。

父の祖、佐伯貞則は、千二百年前に、大伴家持に従って、この越中に赴任した。家持が都に帰った後、ここに止まり、土着したという。現在この家の当主は、百六十五代目である。

以前、福岡駅の駅長に聞いたのだが、ここらあたりの年寄りは、佐伯家のことを但馬様と呼ぶのだという。何代か続いて但馬守をしていた事があるらしい。

先代（百六十四代）は、学生時代、私の家に寄留したりして親しかったのだが、昨年、胃癌で、敢えなくなった。彼の遺影を一日眺め、その連合いの玲子さんと、お茶漬を食べたことが、何とも嬉しかった。

他所を訪ねていた妹達と合流して、三日間の私の旅は終った。

ニャーのこと

丸山弘子

向い角のSさんの家では、玄関の前にプラスチックの容器を置き、毎日猫に餌を与えている。毎日与えているが、家猫ではない。

以前は、ここに来れば餌にありつけると知ったノラ達が、何匹も来ていた。しかし、しばらくたつと四匹にきまった。その四匹も時間になると餌を食べにきて、食べ終るとしばらく身づくろいらしきをして、どこかに自分の居場所をきめてあるのか散ってゆく。

四匹のうちの一匹は体が大きく、他の猫とは毛並のちがうちょっと上質の猫である。

「いい猫なのに捨てられたんですかね」と、Sさんはこの猫に対しては、ちょっと自慢する。

そして、親子の二匹がいる。この二匹は、わが家の隣りがまだ木造のアパートだったころ、猫好きの店子が、ちょうど生れた子猫に牛乳を与えていた猫たちだ。この二匹、毛並の色も模様も全然ちがうのに、やっぱり親子だな、と思うときがある。ふだんは知らん顔をしているが、雨が降ったりしてちょっと寒い日は、二匹が体を寄せ合って寝ている。あたたかくなるのだから、そういう時は他の二匹も一緒にいればいいのに、と思うがそれは決してない。

さて四匹目だが、ごくありふれた猫でこれがニャーである。やせていて年をとっている。かつては家猫として可愛がられていたのだろう、通りがかりの誰にでも声をかけられると、寄ってゆき体を撫でてもらっている。私などちょっと意地悪をして、眠っているのに「ニャー」と声をかけると、体を起して寄ってくる。そして体を撫でると喜ぶのが分る。でも本当は撫でるだけではなく、抱いてもらいたいらしいのだ。甘えてすり寄ってくるのだが、私の方はそこまではしない。

餌箱の置いてある場所は、雨の日は雨の日で困るのだが、陽あたりがよすぎて、この夏の暑さに猫達は閉口していた。餌を食べおわると、どこかに涼しいところがあるらしく、一日中姿をひそませていた。

天候がやや落着いた一週間ほど前、ニャーは元気にしているかな、と餌場をのぞいてみた。すると猫たちは一匹もいず、Sさんが寄ってきた。

「あの猫（ニャーのこと）貰われてゆきましたよ」と言う。子猫ではないし、四匹のうちで一番年老いているような猫だったから、「エーッ。本当ですか？　でもよかったですね」、思わず言った。

その貰ってくれた人は近所の方で、皆に可愛がられているニャーを、通りかかった時によく見ていたのだそうだ。しかしこちらとしては、突然ニャーに会えなくなって、少し淋しいし、つまらない。

でも大げさだが、これでニャーの老後は安心だ。猫ごとながら本当によかった。

昔と今

池田桂一

たまに電車に乗ると四季の移ろいがよくわかる。自動車では、たしかによく見えているはずなのだが、運転に気をとられているので、細かいことまでは記憶していない。

電車だと、次の駅の近くにはモクレンの木があるとか、神社の境内には大木のイチョウがあるので、今ごろは黄葉しているのかもしれないなどと思いめぐらす時間がある。

電車での時間もそうだが、やはり徒歩での行程は、更に詳しい記憶がよみがえる。人間の記憶は、目前の光景にゆっくり時間をかける程、記憶の度合が濃くなるようである。

先日、短歌の仲間のひとりから、わざわざ送られてきたパンフレットで、郡山市で開催される県歌人会の短歌祭に参加することにした。

前夜祭から一緒になることにして、福島から郡山行の十四時二十分発の電車に飛び乗った。土曜日だったので、子供連れが多く、満席状態だったので、各駅停車では子供達がうるさいのではと覚悟していたが、意外と静かだった。

見回すと、小学校高学年の子供連れは、ほとんどがゲーム機や、スマホのようなものを手にして夢中になっているのである。親も子供に話しかけるでもなく、横に座っているだけである。列車はよく揺れるので、車内でのゲームなどは目に良くないのに、親はそのことに気がつかないのだろうか、などその光景を目の前にしながら、近視や乱視になって後悔することになるのに、と思ったが、ついに声をかけないで電車を降りた。

私の小学生時代の遊びは、ソフトボールなどの球技が主で、とにかくボールとバットがあり、あとは空地さえあればみんな代り番こでいつまでも遊べて、夕方の食事時が近くなっても帰らないで、呼びにこられてやっと終ることなどが常だった。

空振りをすると、ガキ大将だったYさんに何度も何度も、「コラ！　ボールをよく見ろ」と叱られた。

近くのものをよく見るということは、動体視力をきたえることだったのだと、今になって気がついたのだが、しかし、それはスマホのように近くの動くものを見続けるということではなくて、遠くから近づいてくるものを、はっきり見すえる訓練をすることなので、事柄をはき違えると、とりかえしのつかないことになるはずである。

中学生になって、体育の時間は、先生が不在の時は大抵球技が多かった。ボールをよく見る練習のおかげで野球はもちろん、苦手だった卓球の成績も自分で驚くほど上達して現在に至っている。

ガキ大将などの居ない、自由、平等などと名目だけに縛られた現在の子供たちの教育は、ＰＴＡなどが、教師本来の仕事に口出しをして、先生達にやる気をなくす結果になっている現実を思うと、自業自得といっては言い過ぎであろうか。

幼いころ、先生に叱られたと親達に話しても、お前が悪いからだ、ととりあってももらえなかった先生達への信頼感の力強さはどこにいってしまったのだろうと思っている。

「清紫会」だより

◆第134回　平成二十七年八月二十日（木）、会場・文京シビックセンター三階和会議室
〈提出作品〉市川茂子・墓参り／林博子・朝めし前の

◆第135回　九月十七日（木）、会場・文京シビックセンター三階Ａ会議室
〈提出作品〉林博子・夏風邪／松井淑子・本郷森川町／丸山弘子・ニャーのこと

◆第136回　十月十五日（木）、会場・文京シビックセンター三階Ａ会議室
〈提出作品〉池田桂一・昔と今／市川茂子・私のハンドメイド／大石久美・富山行／林博子・備中高梁物語／松井淑子・公園にて

（松井）

無二の会短信

◆最近の大失態は、携帯電話の置き忘れである。メールなどは全く使用しないので、手にする以外はポケットに入れたままの時が多い。今年の東長生会の総会の折に、会長が突然辞任するというハプニングがあり、急遽会長代行の形で半年以上が経った。年末を控えて、方部会長会、そして市内連合会の会合が重なり、二泊三日の連続して家を空けることとなった。携帯の電池切れになってはと思い、充電を始めたところに、車に乗って下さいと、頼んでもいない迎えの車が着いた。せっかくだからと乗りこみ、集合場所に向う途中に、充電中だったことを思い出したのだが、面倒をかけてはとの思いで、ついに言い出せなかった失敗で、帰宅するまで気掛かりだった三日間を過ごしたことである。

池田桂一

◆今日も秋晴れになると、空をみながら一首詠んだ。遠出してみようか思案していると、電話が鳴って本屋から注文していた本が入った知らせである。一年ぶりに用事があるというKさんの電話に日時を決めて約束した。いつも来る奥さんの使いで、ご主人が来た。一首の下の句で「良き便りなど当てもなく待つ」が、当たったようなまだ誰か来そうな気がする。

市川茂子

◆秋の色づきも銀杏に始まって銀杏に終わるようですが（この辺は街路樹が銀杏なので）、それで

も楓モミジが色づくと本格の秋を感じます。近所の野本小学校は、梶田さん（ノーベル物理学賞受賞者）が出ているので、校舎片側半分の位置にお祝いの横断幕が下がりましたが、残りには、もともとの「こころもからだもじょうぶな子」が下がっています。散歩コースの一部ですが、小学校には、何か思いを誘うものがあります。

小野澤繁雄

◆愛犬ラッキーの遺骨が、都内の哲学堂動物霊園から北海道の日高牧場に移葬されたと知って、久しぶりに北海道へ思いを馳せた。私が航空会社に入社したのは一九五七年、当時、札幌行きは一日に三便で、プロペラ機であった。営業所勤務のため初めて北海道に乗務したのは、一月末の大雪の直後だった。除雪が完了したばかりの千歳空港は、まるで幼い日に夢見た「お菓子の国」そのものであった。その後、仕事、観光、スキーに登山と訪れたが日高地方への機会はなかった。パソコン動画で日高牧場を見ているうちに、ラッキーの終の在り処として相応しいと納得した。それで、今号の連作は日高昆布となる。

河村郁子

◆暑い夏がすぎ、いよいよ秋も深まってきました。これからしばらくの間、紅葉の燃えるような美しい日が続くと思います。今年こそ、紅葉を楽しみたいと思っております。毎年、そのように思いながら、ゆとりがなくて慌ただしくすごしてばかりおりましたので。今年こそ時間を作り、見にゆきたいと、今から楽しみにしております。

谷垣滿壽子

◆金子兜太師の力強い「アベ政治を許さない」の文字が全国各地で掲げられたこの夏、私も戦争法案反対の集会への参加、また、仲間たちと主催した集会の準備などに駆け回った。九月十九日、多くの国民の思いが野蛮なやり方で踏みにじられた。仲間たちは、戦争法を廃棄し閣議決定をくつがえすための県民連合をつくる運動を始めている。私も黙ってはいられないので、末席に加えてもらうことにした。アベ政治によって大切な時間を奪われている人は多いだろう。私は夏の歳時記を仕舞いながら、今夏の作句の少なさに愕然とする。アベと酷暑のせいにしてはいけないだろうが。

新野祐子

◆先日、大腸ポリープ切除のため三日ばかり入院した。物心ついて以来初めての経験である。三日も寝ているのではさぞ退屈だろうと、文庫本を三冊持ちこんだ。ところが主治医の先生や看護師さんがつぎつぎにおいでになる。それは感謝すべきことかもしれないが、ゆっくり本を読んでいられない。おまけに夜の九時には電灯が消えてしまう。結局一冊の半分も読めずに退院した。入院がこんなに忙しいとは、とびっくりした。

松井淑子

◆毎年区民健診を受けている。これまでに一度もなかったことだが、ことしは肺のレントゲンの結果がよくなくて、再検査が必要になった。近くの検査機関でCTをとったが、それでは解決できずもう一段上の検査を受けることになった。今度は大きな病院である。大きな病院だから余計そうなのか、診察してもらう時間の何倍もの待ち時間で、これが疲れてしまう。よくても悪くても早く結果が出てくれないと、残り時間が少なくなっている身としては辛いことだ。

丸山弘子

◆最近、利用者の方とよく笑う。たわいもないことだが、お互いに顔を見合わせて「アッハッハッ」と笑うのは、なんと気持ちの良いことか。目の前の相手から私に、私から相手に、何かが行き交っていると感じる。

山内裕子

◆アメリカとの国交が復活する前のキューバを見ておきたいと今年の二月に訪れた。はじめの二、三日はハバナから二時間ほど離れた砂嘴にあるリゾートで過ごした。そこは完全に外国人観光客のための施設でキューバにあって、キューバではなかった。ハバナでは革命記念館やヘミングウェイの跡を追った。そして八月、マイアミで詩を中心とする団体の十五周年記念イベントに参加した。そのグループは、キューバ革命の時、キューバから逃れた難民たちやその二世たちであった。アメリカの外、チリ、アルジェンティン、ペルー、コロンビア、メキシコなどスペイン語圏の人々が中心であった。偶然だったが、一つの歴史的事件の表と裏を見たような気分である。

結城　文

編集後記

◆《招待席》は、大石久美さんの短歌「伝えてゆかな」。大石さんは「展景」と姉妹の関係にある「清紫会」（エッセイの会。命名は外山滋比古先生）のメンバー。エッセイも面白いが、息長くつづけてこられた短歌は、さらりとした歌いぶりのなかに深い味わいがある。

◆ことしは隔年開催の「山形国際ドキュメンタリー映画祭」があった。十月半ばの八日間、できるだけたくさん観ようと山形市の中央公民館や市民文化会館、フォーラム山形などの会場に通って全部で二十六本観た。ドキュメンタリーというと単なる記録映画と思う人もいるだろうが、決してそうではない。映画祭事務局の畑あゆみさんの言葉を借りれば、「ドキュメンタリーこそドラマ。フィクションより面白い世界が見られる」のだ。

今回はラテンアメリカの特集があり、中南米各国の歴史や自然を身近に感じられたこと、全世界的に女性監督がさらに増えていることが印象に残った。チリを撮った『真珠のボタン』、ペルーの人々を音楽を通して描いた『わたしはここにいる』は、ともに素晴らしかった。大賞とはならなかったが、圧倒されるほどの美しい映像とともに心に残る作品だった。また、二〇〇三年から二年間、イラク・バグダッドで大家族の日常を撮った『祖国―イラク零年』は市民賞を受賞。五時間半余りの大作だが、深い感動を残しながら人生や戦争について考えさせる映画だった。

一般の人に混じって、山形市立第四中学校の一、二年生の生徒約百三十人と先生や職員三十人はアルゼンチン・タンゴのトップにあるペアの愛憎を描いた『ラスト・タンゴ』を鑑賞。監督はとても喜んで、生徒の感想を聞いたあと記念写真を撮ったりしていた。映画はもちろん、通訳を介しての監督やプロデューサーとのやりとりは、中学生にとって大きな刺激となったにちがいない。

ひとつの映画が終わったあとにロビーで監督との質疑応答の時間があるのだが、事務局がユーストリームで撮影していて、見逃しても（次の映画の場所に移動する時間が必要）パソコンで見られたのはありがたかった。夜十時から開くという「香味庵」にも行ってみた。場所を提供してくれているのは漬物屋さん。映画を観終わった人や監督が入り混じり、さまざまな言語が飛び交って一杯飲みながら感想を言い合う場面は、なにか異次元にいるような感じもして楽しかった。

ボランティアが多く、手づくり感あふれる地方の映画祭――それが世界的にも評価され、ドキュメンタリー作家の目標のひとつになっていると聞けばうれしいし、うなずけるものがある。ドキュメンタリー映画祭が山形にとって大切なものであると、あらためて実感した。

（布宮慈子）

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。

季刊 展景 80号
二〇一五年十二月二十日　発行
編集・発行人　布宮慈子
制作　スタジオ・マージン
無二の会「展景」発行所
山形市上町二―一―七―二〇二
info@muninokai.com

Copyright© 2015 MUNINOKAI. All rights reserved.